

# 集団自由あそびを活用した発達障害児療育の実際： 愛着形成と関係性支援（社大福祉フォーラム2013報 告）（各分科会からの報告）

著者	大曾根 邦彦
雑誌名	社会事業研究
号	53
ページ	48-50
発行年	2014-02
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1137/00000276/">http://id.nii.ac.jp/1137/00000276/</a>



# 集団自由あそびを活用した発達障害児療育の実際

～愛着形成と関係性支援～

特定非営利活動法人 心身障害児者療育会きつき会  
代表 大曾根 邦彦

## I. 目的

発達障害に対する療育は「個別指導」を核とし、児童発達支援などの障害児支援制度上も「個別支援プログラム」の実施を支援計画の要件としている。一方で、近年の小児精神神経領域の医学会では、発達障害児が示す不適応行動を対人面の関係障害として捉えて、二次的不適応行動を左右する因子として愛着障害を重視する流れも生まれている。

この二次的な不適応行動を防いだり、軽減したりするための、愛着形成に焦点付けた関係性支援が重視されつつある。この視点から、日常の保育・教育場面でも応用可能な、集団自由あそびを活用した関係性支援の実際について、集団活動事例に基づいて報告する。

## II. 方法

筆者が行政機関から受託している、幼稚園・保育所訪問支援および一般小学校の放課後活動訪問支援による集団活動事例を用いた。この訪問支援は、発達障害特性を持つか、そのような特性が疑われる支援困難事例や、育ちのつまずきを主訴として、訪問要請を受けて行なわれたものである。

訪問支援の目的は、個別事例を主訴としながらも、集団活動の場における発達障害児支援のための従事者の専門性向上である。この専門性向上支援の過程から、訪問支援依頼主訴対象幼児・児童の不適応行動改善と、支援者の理解度に正の相関関係が見られた事例について、その要因を検討した。

### 1. 検討対象訪問支援機関

民間認定子ども園 =1 公立保育所 =1 民間認可保育園 =2

公立公営放課後児童クラブ =8 公立民営放課後児童クラブ =1

### 2. 検討対象集団

年少幼児集団 =3 年少・中幼児混合集団 =1 年中幼児集団 =3 年長幼児集団 =4

学齢児童(小1～小3)20～40名集団 =11

### 3. 検討場面

- ① 主訴不適応行動が示されている場面
  - ② 主訴不適応行動への支援を行なっている場面
- ### 4. 訪問支援による介入
- ① 自由あそび集団活動場面でのあそびに入り込んだ支援
  - ② 幼児・児童相互の関係性に対する介入
  - ③ 関係性に対する介入時の愛着形成要素への焦点付け

## III. 結果

### 1. 支援対象機関毎の集団活動不適応の傾向

- ① 幼児保育の集団活動においては、主訴不適応行動が顕著に示されるのは支援者による課題提示場面よりも、自由あそびの場面が多い。
- ② 放課後児童クラブの集団活動においては、主訴不適応行動は課題提示場面と自由あそび場面の双方で示されている。

### 2. 集団活動不適応と個別支援の関係

- ① 課題提示の集団活動場面で示される不適応行動と支援には、構造化による効果が見られた。
- ② 自由あそび集団活動場面で示される不適応行動と支援には、構造化が困難であるために支援者側に指示内容の変遷などの混乱が見られた。
- ③ 課題提示集団活動場面でも、自由あそび集団活動場面でも、支援者が代わることで発達障害児の不適応行動に差異がみられた。

### 3. 関係性への介入時の愛着形成要素

- ① 発達障害特性を持つ幼児・児童に対する支持の焦点を愛着形成とすることが有効。
- ② 愛着形成支援は短時間でも関係性の変容を促すことができた。

#### 【事例=A】

ADHDで反抗挑戦性障害傾向を示す6歳男児=A

- ① スポーツマンタイプのお兄さん=Bとボールの取り合いになる。
- ② 叱らずに双方から事情を聴く支援者に、Bは身を委ねてくるが、Aは体をこわばらせる。
- ③ 数分かけて公平に双方の主観的な事情を聴きだし、支援者は叱らずに二人を開放する。
- ④ 解放するとき支援者が二人を同時に抱きしめようとすると、Aも身を委ねてくる。
- ⑤ AからBに対して「ごめんね」という謝罪があり、BもAに「ごめんね」と応じる。
- ⑥ 支援者は先に謝罪したAに「偉かったね」と声を掛け、Bにも同様に声を掛ける。

#### 【事例=C】

自閉症スペクトラムの6歳男児=C

- ① 前記事例Aの場面の一部始終を眺めている。
- ② 事例Aの②から③の間に、C自ら支援者に近づいてくる。
- ③ Cは支援者に「おじさんは、秋田のじいちゃん？」と問いかけてくる。
- ④ AとB解放後に支援者が保育士に「Cには秋田におじさんがいる？」と問う。
- ⑤ それを聞いたCは「しんちゃん」と口にする。
- ⑥ 支援者が「クレヨンしんちゃんの秋田のじいちゃん？ 嬉しいな。」と応じるとCは納得。

#### IV. 考 察

事例Aでは、「叱られるのはいつも自分」と感じていたAが、当初は「結局、叱られる。」と思い、支援者を警戒して拒否していたと推察された。Aは多動で集中を欠くという実行機能の課題に基づく要因以上に、日常的に好意的に接してくれる大人さえも拒否してしまい、結果として「反抗的

態度しか取れない子ども」としての評価を定着させる悪循環の中に暮らしていると考えられた。

また事例Cでは、「問題を起こす子を叱らない」おじさんを、C独特の共感の視点から「クレヨンしんちゃんの味方の秋田のじいちゃん」に置き換えていたと推察された。しかし、周囲の大人や児童が的確にこの置き換えを理解することは困難であり、結果として抱えている認知の特性以上に「訳のわからないことをいう子ども」としての評価が定着していると考えられた。

##### 1. 課題提示集団活動場面の不適応行動と支援

未就学幼児の保育・教育では、集団自由あそび場面で不適応行動を示す幼児でも、課題提示集団活動場面では適応的な行動を取れる場面が見られた。このことから課題提示場面では構造化要素による支援効果があると考えられた。

一方、学齢児童の放課後活動の場合、課題提示集団活動場面でも不適応行動を示す児童が多い背景としては、異年齢集団であるために構造化が困難であることが関係していると考えられた。

##### 2. 自由あそび集団活動場面の不適応行動と支援

未就学幼児の保育・教育でも、学齢児童の放課後活動でも、発達障害特性を持つ幼児・児童の不適応行動が多く見られるのが自由あそび集団活動場面であった。構造化困難な自由あそび集団活動場面で、構造化しか手段の無い支援のいき詰まりが確認された。

##### 3. 愛着形成支援の適応範囲と関係性支援

課題提示集団活動場面での愛着形成支援は困難であり、自由あそび集団活動場面での介入による愛着形成の有効性が確認された。この愛着形成支援の焦点は、幼児・児童相互の関係性への介入であり、発達障害特性を持つ幼児・児童に対する支持的介入が中心となる。

##### 4. 愛着形成支援には質的要因が重要

不適応行動を示す場面でのリアルタイム支援が、幼児・児童間の関係性の変容につながることから、愛着形成に焦点付けた発達障害児への支持的介入の質的な要因の重要性が推察された。

## V. 結 語

課題提示の療育手法そのものには、構造化要素が内包されており、支援者がその手法を理解して意図的に用いているか否かにかかわらず、一定の不適応行動改善効果を上げている可能性が高い。一方で、課題提示の集団活動を通じた支援のみでは、こどもの生活場面の中心をなす自由あそび集団活動場面での不適応行動の改善効果が得られなかった。また、医療系療育機関で個別療育を受けている幼児・児童でも、自由あそび集団活動場面での関係障害に起因した不適応行動は改善されていなかった。

一部地域においては、乳幼児健診待合室での様子を観察するために保健師・保育士等を配置して、発達障害特性の早期スクリーニングのために、自由あそび集団活動の場での不適応行動評価が実施されている。しかし、課題提示を伴わない自由あそびを通じた集団活動は、多くの場合は行動評価の場としても、支援の場としても位置づけられていない。しかし、生活年齢が等しい定型発達の幼児・児童と同等の適応行動を獲得できていない、育ちにつまずいている子どもたちのほとんどは、集団自由あそびの時間帯と場でこそ多様な不適応行動を示している。

今後は、関係障害に起因した社会的不適応が顕在化する、集団自由あそび場面を通じた関係性支援事例の蓄積が必要になる。そして、愛着形成をその支援と行動評価の焦点として位置づけることの意義と、効果の検討が求められる。

## おわりに

発達障害については、2013年のアメリカ精神医学会による診断基準改定版『DSM-5』がだされ、本年には日本でも翻訳版が出される予定となっている。自閉性障害については、アスペルガー症候群の診断名がなくなり、自閉症スペクトラム障害(ASD)に統一される一方で、児童個々の状態像の細部をしめす特徴が併記されることになった。

従来は、教育や保育・福祉領域では「医師によ

る診断」が支援上の個別具体的な工夫にはつながらず、「診断名の独り歩き」とも言える実態が見られた。しかし今後は、診断名よりもそこに個々の特徴として併記される状態像が、保育(福祉)・教育領域の支援指針としての役割を果たすことが期待される。

この診断基準改善に応じるためにも、保育(福祉)・教育領域固有の支援の道具ともいえる集団活動の活用と、集団活動に不可欠な対人関係性を通じた支援、その中核としての愛着形成支援の実務技能の向上が大切である。

## 謝 辞

茨城県立こども病院の田中竜太医師から多大なるご支援を頂き、筑波大学大学院人間総合科学研究科教授の宮本信也先生、茨城県立医療大学医学センター小児科教授の岩崎信明先生から、医療面での助言を頂きましたことを深謝いたします。

## 文 献

- 大曾根邦彦「障害児に対する学童保育実践」、『社会福祉研究』54号、鉄道弘済会、1992年。
- L. ウィング著、久保紘章、佐々木正美、清水康夫監訳『自閉症スペクトル』、東京書籍、1998年。
- G. コノブカ著、福田垂穂訳『収容施設のグループワーク』、日本YMCA同盟、1967年。
- H.B. トレッカー著、永井三郎訳『ソーシャル・グループワーク』、日本YMCA同盟、1978年。
- 大曾根邦彦「障害者自立支援における社会福祉実践の課題」、『社会福祉研究』106号、鉄道弘済会、2009年。
- 大曾根邦彦「施設援助の課題」、『ソーシャルワーク研究』Vol.13 No.3、相川書房、1987年。
- 大曾根邦彦『小児の精神と神経』51巻2号・「発達障害児に対する集団あそびを通じた対人関係性支援の試み」、日本小児精神神経学会・アークメディア、2011年。
- 河合隼雄『子どもの宇宙』、岩波新書、1987年。
- U・フリス、富田真紀ら訳『自閉症の謎を解き明かす』、東京書籍、2009年。